仏教・真宗を楽しく学びながら
生活に活かす講座 VI－06

今からはじめる仏教入門

第六回　名言・比喩・説話

2022年10月25日 ／ 厳 念 寺

講 師：ケネス田中先生

武蔵野大学名誉教授

連絡先：chacotanaka@gmail.com

(質問・意見歓迎)

第六回　名言・比喩・説話

十月二十五日

真理の言葉（名言）……1

①自立　②すぐれた勝利　③今を大切に　④他人の過ち
⑤憎しみを越えて　⑥香りのない花　⑦尊さ　⑧教えの本質

〈質疑応答　①〉……14

比　喩……19

①双頭の鳥　②三種の文字　③泥に咲く花

説　話……25

①琴の糸　②衣服の提供　③竹やぶの恩

〈質疑応答　②〉……32

今回は、私が大切だと思っている仏典からの名言・比喩・説話を取り上げてお話します。

私が二年前に出版した『**Jewels**（宝石）』というアメリカ人の若者たちのための仏教入門書（英語版）があるのですが、この本の内容から取り出しながら、今年の講座でお話しております。

また、今回の話に取り上げたいくつかの経典からの言葉は、仏教伝道協会の『**ブッダに学ぶさとりの言葉　－仏教聖典副読本**』（仏教伝道協会、平成三十年）に主に依っています。そして、レジュメに記載したその言葉や説話等についての〈**解説**〉は、『**Jewels**（宝石）』に私が英語で書いたものです。それを、実はこの講座を受講している鴻野立明さんが現在、日本語への翻訳をしてくださり、私が少しだけ編集した文を今日の講義で使わせてもらいます。

今回の講義では、例えば「キサーゴータミーの芥子（けし）の実の説話」など、既に以前にお話したものや、よく知られているものに関しては扱いませんでした。

真理の言葉（名言）

一、自　立

自らを灯明とし、自らを拠り所として、他人を頼りとせず、

法（真実の道理／教え）を灯明とし、法を拠り所として、他を拠り所としてはならない。

（仏陀、『大般涅槃経』）

〈解　説〉

この言葉は、仏陀・釈尊が亡くなる直前に弟子たちに残した最後の言葉の一部です。その中で、先ず仏陀は私たち一人ひとりに、真理（**法を灯明とする**）に基づいて自分自身を信じる（**自らを灯明とする**）ように教えたのです。つまり自分の判断を信頼しなさいということです。そして同時に「**法**（真実の道理／教え）**を灯明としなさい**」と述べています。「法」というのは、「真理」という意味と真理に基づく「教え」という二面の意味があります。

ここで、私が強調したいのは「**自ら**」という言葉です。自分がちゃんと納得することの必要性を強調して、仏陀は真理を「**直接的に**そして**個人的に**」というのは、自分勝手に理解するというのではなくて、自分にその教えの内容を当てはめて、自分の経験や理解に基づいて、その教えを味わいなさいということです。そして、同時に「法（真実の道理／教え）」が判断の基準となり、頼りとなるのですね。法と自分の判断の両方が必要となるのです。

自分に合った理解する私たちの能力を信頼したのです。他の誰かが言っていることを真理であると

単純に信じないように、私たちを思いとどまらせるように勧めたのです。それは、私たち一人ひとりが〈内なる宝石（仏性）〉を持って、仏になれる可能性を有しているからです。

最近、旧統一教会の「カルト」が問題になっていますね。カルト問題は、まさにここに述べた「自らを灯明とする」ことに関係しています。つまり、自分で考えなさい、自分でしっかりと納得しなさいということが、本来の仏教の大切なあり方です。しかし、そのようなことは、カルト集団では勧められないのです。自分の判断などは、厳しく抑えられているのです。

ワケの分からない物事を信じるというのではなくて、自分自身の体験に基づいて、よく考慮することの重要性です。「他に頼らない」ということは、自分自身の体験や考えを抜きにしたままやみくもに他に頼ることはダメですよという意味です。先生や仲間など他の人に相談しても良いと思います。

仏教は「カルト（反社会的な狂信的な集団・教え）」ではありません。カルトというのは、自分の意思や判断を無視していく傾向があります。

二、すぐれた勝利

おのれに勝つのは、戦場（いくさ）で何千もの敵に勝つよりもすぐれた勝利である。

（パーリ『法句経（ほっくきょう）』より）

〈解　説〉

世の中には、常に他の人を支配しようとする人がいます。しかし、そのような人は幸せであると言えないでしょう。本当に幸せになるためには、メンタル面でもスピリチュアル面でも自分自身を磨く努力をしなければならないと思います。

ですから他人を支配するのではなく、自分自身に勝つ。これがうまくいけば、それは他人を支配するという見せかけの勝利よりも、千人の敵に勝つよりもはるかに価値のある勝利となるのです。その人の意志に反して人を支配することは本当の幸福ではありません。一方、自分自身を知り、自分自身をコントロールすることが真の幸福への秘訣です。

独裁主義者というのは他者を支配したい。基本的には他者を支配することによって自分の価値を生み出している。ロシア・中国・北朝鮮・イランなどの指導者たちは、この教えに反しているのではないかと、私は思います。

「**おのれに勝つ**」というのは、自分をよく知って、自分をコントロールするということですね。道元禅師（曹洞宗の開祖）にも「**仏道を習うとは、自己を習うことである。**自己を習うとは、自己を忘

れることである。自己を忘れるとは、自己がすべての存在に証されることである（『正法眼蔵』現成公案）」という言葉があって、仏教の目的は自分を知ることだとおっしゃっています。

三、今を大切に

過ぎ去った日のことは悔いず、まだ来ない未来にはあこがれず、
とりこし苦労をせず、現在を大切にふみしめてゆけば、身も心も健やかになる。

（パーリ『中部経典』より）

〈解　説〉

要は「**今を大切にする**」ということですよね。以前に、仏教が欧米で人気があるということを話しましたが、その理由の一つは「今を大切にする」ということを仏教が強調しているからなのです。過去も未来も大切なのですが、それにこだわり過ぎて、今を忘れてしまうということはダメだよということです。

現在の私たちは、過去の産物であり、また、将来に備える必要があるのは事実です。皆さんの多く

は、夢を実現するために勉強したり訓練したりしています。しかし、私たちはどの瞬間も〈今・ここ〉にしか生きていないのです！　仏教の教えは、私たちが〈今、ここ〉に充実して生きるのを助けてくれるのです。〈今・ここ〉が大切であることを表すのが、以前にも紹介している次の巧妙なシャレで終わる文章です。

Yesterday is history.　Tomorrow is a mystery.

昨日は歴史（過ぎ去ったこと）。明日はミステリー（分からない未知のこと）。

However, this moment is a gift.

しかし、**この今**の瞬間は**授かりもの（恵み）**である。

That is why we call it(this moment) the present.

だから、私たちは**この〈今〉**を**プレゼント**と呼ぶのです。

（※**英語でプレゼントはpresent ＝「贈り物」または「現在」を意味する**）

これはインド系アメリカ人の医者で、宗教と医学の融合を説く**Deepak Chopra**という人の言葉だと言われています。

「今を大切にしましょう」ということは、仏教の「諸行無常」という教えの一つのメッセージです。「諸行無常」というのは、物事は変化し続けているのだからこだわるな、執着するなというのが伝統的な理解ですけれども、もう一つは、ここに取り上げたお釈迦様の言葉にあるように「今を大切にしましょう」ということです。

執着するなという意味もありますけれども、私たちのような出家者でない者には「今を大切にしましょう」というメッセージの方が分かり易いし大切ではないかと思うのです。

家族も、ずっと永遠に一緒にいるということはありません。だから、目の前にある「今（現在）」を大切にしましょうということです。

四、他人（ひと）の過（あやま）ち

他人の過（あやま）ちを指摘するのは簡単だ。しかし、おのれの過（あやま）ちを認めるのは難しい。

（パーリ『法句経（ほっくきょう）』より）

〈解　説〉

これはまさにそうですね。しかし、人間として成長し、家族や友人との関係を改善したいのであれば、私たちは自分の過ち（あやま）や失敗をすすんで認めなければなりません。人間関係で重要なことは、やはり自分自身の方に目を向けて、自分の過ちを意識することでしょう。こう言うのは簡単ですが、なかなか難しいことですね。

完璧な人などはいませんし、私たちは皆間違います。実は、自分の過ちを認めることは弱さの表れではなく強さの表れなのです。それは〈内なる宝石〉を輝かせたり、悟りを実現したりするための前提条件であるからです。

今、話題となっている辞任した山際大臣は、もっと早く自分の過ちを告白していれば、そこまでにはならなかったのではないでしょうか。「記憶にありません」一点張りで認めないということが、大きな問題になってしまった。それは政治家だけではなくて、私たちも皆、同じようなことが言えますよ。特に身近な人たちに対して自分の過ちや欠点を認めることの強さが大切です。

五、憎しみを越えて

憎しみは、憎しみによって鎮めることはできない。憎しみは、憎しみを捨てることによって鎮まる。これは永遠の真実である。

（パーリ『法句経』より）

〈解　説〉

これは非常に有名な言葉なので、皆さんも聞いたことがあるのではないでしょうか。世界情勢を見回しても、憎しみに対して憎しみで対応すると悪循環の連鎖が止まりません。今のウクライナでの戦争もそうですね。

二週間前のアメリカ、フロリダ州での乱射事件があって、二十人くらいの先生や子供達が犠牲になりました。その裁判が最近あって、犯人は死刑でなく終身刑という判決になりました。ただ遺族の大半は納得できない。死刑を求めていた。

そこで、本当であったら「**憎しみは、憎しみによって鎮めることはできない。憎しみは、憎しみを捨てることによって鎮まる**」という言葉にあるように、恨みや憎しみによって対応するというよりも、死刑ではなくて終身刑で殺さないという方が仏教的でしょう。しかし、そういう私たちは傍観者に過ぎません。自分がその遺族であったら、やはり仇を取りたいと思うようになる可能性は多いあるでし

ょう。いかにこの教えを実践することが難しいことであるかということがわかりますね。

こうした重度な問題ではなくて、日常のもう少し軽いレベルで考えてみてはどうでしょうか。例えば、家族や友達とケンカしてカッとなったりした時に、この教えの言葉を思い起こしてみる。怒りや憎しみに対して、怒りや憎しみで対応するということは、良い結果にはつながっていきません。この大切な言葉の趣旨を実現することで、良い人間関係を築いていきましょう！

六、香りのない花

言葉だけ美しくて、それを実行しない人の言葉は、
艶(つや)やかだけれども香りのない花のようなものである。　（パーリ『法句経(ほっくきょう)』より）

〈解　説〉

このような口先だけの人が周囲にいるのではないでしょうか。また、私たち自身がそのようなことを時々していることがあるかも知れません。これは「口だけで行動が伴わない」ことに対しての警告

です。私たちもそのような人々を知っていることでしょう。言葉と行動が一致していないならば、恐らくそういう人とは一緒にいたくないでしょう。なぜでしょうか？　それはそんな人を信頼できないからです。

前に説明しましたように、仏教には「三業」という言葉があります。人が行い、話す、考える・思うという三つの行為（三業／口業・身業・意業）は一致する必要があるのです。一致していないのは、ちょうど見た目がもし美しくても、香りのない花のようなものであるという比喩です。

七、尊さ

人間として生まれるのは稀である。私は今生きていることに感謝している。
仏陀が世に出現することは稀である。仏陀の教えを聞くことができて感謝している。

（パーリ『法句経』より）

〈解　説〉

人間として生まれるのはなんと希有なことなのでしょう！　仏教の説話における「カメと浮木」と

いうの比喩(ひゆ)は、この真理を伝えています。

広大な海の海面に一つの木片が浮かんでいる。その木片には直径数センチメートル程の穴が開いている。海底に生息する目が見えないウミガメが百年に一度、海面に浮かび上がる。そのカメが海面に浮かび上がり、広大な海にたまたま浮かぶ木片の穴に頭をひょいと入れてしまうことと同じくらいに、人間として生まれる可能性は希有(けう)なことである。

ですから、私たち人間の命を無駄にせず、人生の夢を実現し、そして他の人の役に立ちましょう。仏教によれば、人生で最も重要な目標は、仏陀の教えによって可能になる悟りを実現することです。だからこそ、私たちにその道を示すために仏陀がこの世に現われたことを称賛し感謝したくなるのです。

皆さんにとっては、仕事も家族も大切です。それも大切ですけれども、仏教の立場から言えば、より重要なことは、この世に人間として生まれて来て、私が悟り・目覚めることです。つまり、目覚めることによって、本当のしあわせを体得することです。

仏教の行事や儀式等では「**人身(にんじん)受け難し、いますでに受く。仏法聞き難し、いますでに聞く。此の**

身今生において度せずんば、さらにいずれの生においてかこの身を度せん。大衆もろともに、至心に三宝に帰依し奉るべし・・・」という「三帰依文」という言葉をしばしば唱えることがあります。人間として生まれて来ることは難しい。けれども今その身を受けています。そして「仏法（仏さまの教え）聞きがたし」。人間として生まれて来ることも難しいけれども、同時に仏教の教えを聞くことも難しい。しかし、今既に聞くことができた。今やらないと、この人生で目覚めを少しでも体得しないと、いつそれをやるんだ!というのが三帰依文が我々に促していることなのですね。

八、教えの本質

すべての悪を避け、善を求め、心を清く保つ。これが仏陀の教えの本質である。

（パーリ『法句経』より）

〈解　説〉

この言葉の最初の部分である「**すべての悪を避け、善を求め**」は、他の多くの宗教に共通しています。しかし、仏教がおそらく他の多くの宗教よりも強調しているのは「**心を清く保つ**」という最後の

言葉です。それは、最初の部分（「すべての悪を避け、善を求め」）が仏教の目的である「清い心」を実現するための手段だからです。

仏教の目的は、道徳的および倫理的に良くなるだけでなく、私たちの心を清くすることです。智慧（「四法印」や「四聖諦」）によって実践すれば、私たちの煩悩（貪欲、怒り／憎しみ、愚かさ）が減少します。私たちが心を清くするとき、より幸せになり、より穏やかな気持ちになります。

以上のことをまとめますと、このようになります。悪を避け善を求める　↓　智慧を養う　↓　煩悩が減少する　↓　**心が清くなり**幸せが増す。

〈前　半　終　了〉

〈質疑応答　①〉

〈ケネス〉　Kさんは『**Jewels**』を日本語に翻訳してみて、今日の話で取り上げた言葉の中でどれが特に惹かれたでしょうか?

〈①〉　**それぞれ考えさせられるところがありますが、少し気になっているのは、「憎しみは、憎しみによって鎮めることはできない。憎しみは、憎しみを捨てることによって鎮まる。これは永遠の真実である。」という言葉です。これをジャヤワルダナ元スリランカ大統領が、一九五一年のサンフランシスコ対日講和会議の際に「Hatred ceases not by hatred but by love.」という言葉で仏典から引用した演説の一部です。そして元大統領は対日賠償請求権を会議で放棄させることに貢献しました。こういう話がある一方で、アメリカの九・一一のテロ事件の後に、リチャード・ギアが同様の趣旨の話をしたところ、皆から総スカンをくったということもありました。それが内容が正しい事であっても、それをどうやって他者に伝えるかということには難しい面があるのではないかなと思いました。**

〈ケネス〉　二つの歴史的な事件について話していただきましたね。スリランカのジャヤワルダナ元スリランカ大統領が「**憎しみは、憎しみによって鎮めることはできない**」という言葉を演説の中で言ってくれました。もし、日本が賠償金を払っていたら日本の経済は、その後かなり大変で戦後のめざましい復興はなかったかも知れません。ですから、仏教の教えが歴史を変えたのですよ。

一方、二〇〇一年の同時多発テロの後では、その恨みによってアフガニスタンやイラクまでアメリカは侵略して、その後のいろいろな問題を起こしてしまいました。何万ものイラク人と何千人ものア

メリカ兵士が犠牲になりました。だから仏教的な考えの方が平和をもたらすと言えると思います。

これは、普段の我々の人間関係の中でも同じようなことが言えます。仏教を学んでいれば、攻撃されても、それに同じように対応せず、冷静に対応することが少しでもできるようになると思います。

〈②〉　こういう仏教的な〈許す〉という考え方は、ある意味で犠牲者だけに許される究極の気づきの言葉ではないのかなと思えます。犠牲者以外の他者、ましては加害者が同じようにこういうことを言える権利があるのだろうか。普遍的な真理であるのでしょうが、犠牲者以外の他者、ましては加害者口からはなかなか伝えることができない言葉なのかなと思いました。犠牲者に与えられた、犠牲者自身を救える言葉であるということに、犠牲者自身が気づいて行くことが大切なのかなと。そういう気づきを得られるのが、普段に仏教の教えを学ぶ中から生まれて来るのかなということも同時に感じました。

〈ケネス〉　この言葉は被害者が実践する言葉であって、加害者には当てはまるのかということでしょうか？

〈②〉　そういう意味ではなくて、最終的に加害者の方はいろいろな償いをたぶんするのではないかと思うのですね。でも〈許すか許されないか〉ということは、加害者の行動によってのみによって起

こることではなくて、その行動が一つのきっかけとなって、犠牲となった方が加害者を許すという気持ちになるかどうかということなんですね。加害者として、自分の犯した罪に対して、いろいろな形での償いというのは当然しなくてはいけないし、それはやるべきであると思うのです。周囲の人たちも犠牲者の心を少しでも和らげるような活動などをしなければならないと思います。ただし、究極的には（被害者が）〈許す〉ということしかないのかなと思うのです。それができるのは、やはり犠牲になった方だけしか許されないことではないかと、私は思うのですね。

〈ケネス〉　本当の心の平和は〈許す〉ということだと思うのですけれども、それはなかなかできない。今日の話の中で取り上げた、アメリカの乱射事件で子供たちを失った親たちは、本当に辛いだろうなと思うのですけれども、許すとは言っていないのですよね。

二十年くらい前にも同じような事件がありました。孫をテロでなくしたその祖父が「私は許すことにしました」と、そうすることによって自分自身も救われるというようなことを言っていたのです。それを聞いて、「偉いなあ」と私は感動しました。最終的な心の平和・安穏というのは、やはり、そこまでとことん〈許す〉というか〈受け容れる〉ということではないでしょうか？　しかし、葛藤はあるとは思いますけれども。

〈質疑応答　①〉

乱射事件の被害者遺族たちに対して、我々第三者が「あなたたちはそれを許さなければいけない」なんていうことは言えないですよね。

法然上人（浄土宗の開祖）は、幼い時に父親が暗殺されました。その時のお父さんの最後の言葉は「仇をとるな」ということでした※。そういう経験があって、仏道を志して、後に多くの人たちに安らぎの教えを広めていくようになりました。

〈③〉　私は「Yesterday is history. Tomorrow is a mystery. However, this moment is a gift. That is why we call it(this moment) the present.（昨日は歴史（過ぎ去ったこと）。明日はミステリー（分からない未知のこと）。しかし、この今の瞬間は授かりもの（恵み）である。だから、私たちはこの〈今〉をプレゼントと呼ぶのです。）」という言葉が私は好きです。

〈ケネス〉　この言葉は、英語の好きな人にとっては洒落たシャレが利いた言葉ですよね。人生は、本当〈今〉〈目の前〉にしかないのですよね。しかし、目の前にあることへ意識しながら深く生きるということはなかなか難しいことです。昨日何を食べたか憶えていますか？　ボッーと食べていたのではないですか？　心の余裕がいくらかあれば〈今・ここ〉に意識が行くのかも知れませんね。

〈質疑応答　①〉

比　喩

一、双頭（そうとう）の鳥

昔、双頭（そうとう）の鳥が住んでいた。前の頭は身体の前にあるため後ろの頭よりはるかに多く食べることができたので、後ろの頭は前の頭を快く思っていなかった。後ろの頭の苛立（いらだ）ちは強い妬（ねた）みに変わり、次に前の頭への憎しみに変わった。ある日、後ろの頭は前の頭が食べていた食べ物に密かに毒を入れて前の頭を傷つけようとした。

さて、前の頭は毒を食べて本当に具合が悪くなった。しかし、後ろの頭もすぐに具合が悪くなった！妬（ねた）みと憎しみのために、後ろの頭は前の頭と同じ身体を共有していることを忘れていたのである！

（『Samyukta-ratna-pitaka sutra』）

〈解　説〉

この比喩の伝統的な伝え方では、後ろの頭自身が毒を食べてしまうため、ポイントが分かりにくくなります。それで、私はそれを「手直し」して、後ろの頭が前の頭に毒を盛ることにし、もっと分かりやすくしました。ただポイントとしては同じことです。

「**四法印**（①諸行無常・②諸法無我・③一切皆苦・④涅槃寂静）」の第二の印（諸法無我）が述べている通り、私たちは相互に関連し、相互に依存しています。世の中がいかにつながっているかという事は、世界中に広がってしまったコロナ禍でも証明されたことですし、約百年前に大きな被害があったスペイン風邪の場合も同様でした。しかし、今回、世界はもっと相互依存していることがパンデミックをより長く続くものにしています。この真理は、私たちのグローバル化した経済の特質と気候変動の解決策に表れています。

鳥の後ろの頭のように、私たちが他の国々を高関税で厳しく罰したならば、彼らは私たちの製品を買わないことによって報復します。つまり私たちは皆、損をします。

一方、前の頭は、後ろの頭がどう感じているかについてもっと敏感であるべきでした。もしそうしていたならば、後ろの頭が同じ量の食物を食べていなかったことで、幸せではなかったことに気づい

たことでしょう。そうしていたならば、後ろの頭の悪意のある行動を防げたことでしょう。

我々は、地球規模の気候変動について特に関心を持つべきです。地球の反対側にある他の国が汚染を続けば、私たちに壊滅的な結果をもたらすことになります。また同様に、私たちの国が汚染すれば同じことが世界の他の国々にもたらすことになるのです。

ウクライナ戦争についても同様なことが言えると思います。それは国と国との関係だけではなくて、私たち個人個人の人間間のレベルでも当てはまることなのです。

二、三種の文字

この世には三種の人がある。一番目は岩に刻んだ文字のような人で、しばしば腹を立てて、その怒りを長く続け、怒りが刻み込んだ文字のように消えることのない人をいう。

二番目は砂に書いた文字のような人で、しばしば腹を立てるが、その怒りが砂に書いた文字のように速やかに消え去る人を指す。

三番目は流水に書いた文字のような人で、流水の上に文字を書いても流れて形にならないよ

うに、他人の悪口や不快なうわさ話を聞いても少しも心に跡を留めることもなく、彼らの心はいつも純粋で平静です。

（パーリ『増支部経典』より）

〈解　説〉

この比喩は、私たちが怒りにどのように反応するかということを表しています。要するに人の性格の比喩として三種類の文字があるという、私の好きな喩え話です。

一番目は、岩に刻まれた文字のような心を持っている人は、強くに怒り、長い間その怒りを持ち続けるのです。彼らは怒りを振り払うことができません。その怒りは日常生活に悪影響を及ぼし、勉強や仕事に集中できなかったり、よく眠れない場合が生じます。

そして二番目のグループは砂に描かれた文字のような人々です。ほとんどの人はこのグループに含まれると言えるでしょう。つまり、しばらくの間、動揺したり怒ったりして気分が悪くなるのです。

そして、仏教で理想とされるのは第三番目のグループの人たち（流水に文字を書かれたような人格）です。私たちは皆、この三番目のグループのようになりたいと思いませんか？　このグループの人たちの心は流水に書かれた文字のようなものです。怒った時でも、褒められた時でも、すっと流して執着することがありません。それにしばられていない。だから何かあっても悪影響は受けない人たちだ

と思います。

ただし、彼らは他人や世界のことに無関心であるということではありません。彼らは自分に自信を持ち、他者への思いやりも持っていて、彼らに向けられる虐待、うわさ話、不快なことに振り回されないということです。

もし彼らが怒りを表すとしたら、それは彼らが不当な行為に苦しんでいる人々や差別されている人々に同情し、力になりたいからなのです。慈悲の心から生じる怒りなのです。ガンジー、マーティン・ルーサー・キング、ダライ・ラマのように、彼らは「理にかなった」怒りを感じざるを得ないのです。このような方々は、他の人たちの幸せを思って怒りを感じているのであって、私的なことで怒りを感じているわけではありません。しかし、彼らの心は根本的には純粋な流水のようなものです。

皆さんは、この三つの中で、どのグループに入るでしょうか？　たぶん私たちは、だいたいは第二グループだけれども、時には第一グループに入るかも知れませんよね。できれば、もっと第三グループに入るようにしたいですね。

三、泥に咲く蓮華

美しい良い香りの蓮華（れんげ）は清らかな高原には生えない。むしろ沼地の泥の中から咲くのである。このように煩悩の汚れの中から純粋な悟りが開かれる。異端者の誤った見方や煩悩の妄想でさえ悟りの種になる場合がある。

悟りは貴重な真珠のようである。それを得るためには鋭くとがったサンゴ礁やどう猛な鮫などの危険をおかして海の底に潜らなければならない。貴重な真珠の悟りを得るためには、煩悩の危険に真っ向から向かわなければならない。うぬぼれと身勝手さの険しい岩山の中で道に迷うことになってこそ、はじめて菩提心（悟りにつながる道を求める心）**を起こすようになるであろう。**

（『維摩詰所説経（ゆいまきつしょせつきょう）』より）

比　喩

〈解　説〉

蓮華は仏教を象徴する花です。私たちが人生で最大の喜びを思い出す時、それはしばしば困難、失望、または大変な努力の**後に**訪れています。ですから、泥の中から蓮華（れんげ）が育つということです！　泥は欠点・困難・不幸を象徴しています。欠点があるために、私たちは同じ過（あやま）ちを犯さないように一生懸命に努力し、より良くすることを目指すようになるのです。そして、不幸があるために、私たち

はより幸せになる方法を見つけるよう努めるのです。そして、目標を達成すると改善と幸福の蓮華を実感するのです！

多くの方がスポーツチームで負けて悔しい思いをしたけれど、次のシーズンには返り咲き、挽回の勝利を収めたという経験があるのではないでしょうか。これは、チームのメンバー全員が再結集して弱点を修正し、チームのパフォーマンスを向上させるために大変努力した結果なのです。

第二の点、幸福についてですが、それは私の最初のガールフレンドとのとても辛い別れで、私が自分の過ち（あやま）から学ぶきっかけとなりました。その反省と努力が原因の一つとなり、その後に四十六年連れ添うことになった妻との関係が、私の人生の宝物または蓮華（れんげ）となったと思っています（笑）。

ですから、仏教では、蓮の花が泥に生えるように、「欠点」と「改善」、そして「不幸」と「幸福」を表裏一体として見るのです！　困難や苦悩を教訓として活かしていくことです。泥は、私たちの人生の「良くないこと」に立ち向かう必要があることを意味し、そうすれば、人生の「素晴らしいこと」を蓮華の花が咲くように実現するためのきっかけや動機となるのです。

説　話

一、琴の糸

富豪の家に生まれたが、生まれつき体が弱かったシュローナという青年がいた。彼は悟りを得ることについて非常に熱心であり、仏陀の弟子になった。悟りへの道で、彼は一生懸命に努力したが、努力し過ぎてついに足から出血してしまった。

仏陀は彼を哀れんで言われた。「シュローナよ、あなたは家にいたとき、琴を学んだことはあるか。琴は糸を張りすぎても、緩めすぎても良い音で音楽を奏でられない。糸がちょうど良く張られた時に良い音で音楽を奏でられるものである。

悟りを得る道も琴の糸を調節するのと同じようなものである。怠れば道を得られず、またあまり張りつめて努力しても決して道は得られない。だから、人はその努力についても、よくその程度を考えなければならない」

この教えを受けて、シュローナはよく会得し、やがて悟りを得ることができた。

（パーリ『律蔵』「大品」より）（『雑阿含経』）

〈解　説〉

この説話は、いろいろな事にも当てはめられると思います。私たちも何かやるべき事があって、一生懸命にやろうとする場合に、あまり張り詰めて頑張り過ぎると良い結果が得られないことがあるでしょう。仏教的にいうと「中道」という言葉があります。目覚めや悟りを含め、人生の目的を達成しようとするときに極端に行くことの欠点を指摘しています。

覚えていますか？　シッダールタ王子は出家する前にはお城にいた時には快楽だけの人生でした。そして、もう一方では、出家してからしばらくは厳しい修行の人生という極端な道を歩んだのですが、どちらも避けた結果として目覚めを達成（成道）しました。（『ブッダに学ぶさとりの言葉　―　仏教聖典副読本』四十二頁を参照）

シッダールタは厳しい修行の中で、一日に一滴の水と一粒の米しか口にせず、その結果、骨と皮になり修行を続ける力がなくなってしまいました。この説話のシュローナは自身を極端な厳しさにさらすという同じ過ち（あやま）を犯し、結局きつく張り過ぎた琴の糸のようになっていたのです。

私たちは、こうした苦行をするわけではありませんが、いろいろなやらなければならない事があった場合には、この説話が教えるように、弦が緩すぎてもダメですし、張り詰め過ぎても良い結果が生まれて来ないことを思い出してください。

二、衣服の提供

アーナンダ（阿難／釈尊の弟子）が、ウダヤナ王の妃・シャマヴァティーから五百着の衣を供養された時、アーナンダはこれを快く受け入れた。

王はこれを聞いて、アーナンダが貪りの心から受けたのではあるまいかと疑った。王はアーナンダを訪ねて五百着の衣をどうするか聞いた。

アーナンダは答えた。「大王よ、多くの比丘（修行僧）は古着を着ているので、彼らにこの衣を分けてあげます」

「それでは古着はどうしますか？」／「古着でベッドカバーを作ります」

「古いベッドカバーを使い古したらどうしますか？」／「枕カバーにします」

「古い枕カバーは？」／「床の敷物に使います」

「古い敷物は？」／「足ふきを作ります」

「古い足ふきはどうしますか？」／「雑巾にします」

「古い雑巾は？」／「大王よ、私どもはその雑巾を細々に裂き、泥に混ぜ込み合わせて、家

を造る時に壁の中に入れます」

ものは大切に使わなければならない。生かして使わなければならない。これは「わがもの」ではなく、一時的に預っているものに過ぎない。

（『雑宝蔵経』より）

〈解　説〉

アーナンダはお釈迦様に長年付き添った弟子であり、従兄弟でもあり、女性にもてたらしいのですが、悟るのがとても遅かったと伝えられています。

アーナンダが五百着というたくさんの衣を寄進されたことを王様が聞いて、アーナンダが貪りの心からそれを受け取ったのではないかと疑ったというわけです。そこで王様は「いったいこんな五百着もの衣をどうするつもりなんだ?」と問うたという話です。

この説話の最後の部分に「**わがものではなく、一時的に預っているものに過ぎない**」とあるところが、特に私は重要だと思っています。このように考えると、現代の大量消費（浪費?）社会も少しは良くなるのではないでしょうか。

私たちには、もっとアーナンダの節約の精神が必要です。使い捨て文化では、私たちは多くのものを無駄にしています。使用済みのプラスチック製のコップや道具から電子機器まで、あらゆるものを捨てています。現在、海には何百万トンものごみ、特にプラスチックが捨てられています。この廃棄

物はすべて、便利さの名の下に作り出され、地球から取り出されたものを含め安価に入手可能な原材料によって可能になり、低賃金の人々によって製造されています。

私も気になってプラスチック製のゴミはどうなっているのか尋ねてみました。以前は燃やしている聞いていましたが、今はある程度はリサイクルして使っているそうです。私はリサイクルしてもらうために、ちゃんと洗ってからリサイクルに出す努力をしています。仏教的に言えば、モノを使ってからすぐに捨ててしまうというよりも、なるべく無駄にしない。ヨーロッパなどでは既に十数年前からレジ袋などを廃止していました。ようやく日本も最近はそのようになりつつあるようです。

ですから、私たちは本当に、物質的なものを注意深く、畏敬の念を持って、無駄にせずに扱うアーナンダのやり方（reuse〈再利用〉/reduce〈減らす〉/recycle〈リサイクル〉）を身に付ける必要があるのではないでしょうか。

三、竹やぶの恩

ヒマラヤ山脈の麓（ふもと）のある竹やぶに多くの鳥や獣と一緒に一羽のオウムが住んでいた。あ

る時、大風により竹と竹とが擦れあって火事が起こり、鳥も獣も怖がって混乱した。オウムは、一つには大勢の鳥や獣の恐怖と苦しみを哀れんで、一つには住居を与えてくれた竹やぶの恩に報いるために、他の生き物を救うために、できることはすべてしようとした。近くの池に入っては翼を水に浸し、空にかけのぼっては火を消すために滴(しずく)を燃えさかる火の上にそそぎかけ、竹やぶの恩を思う心と限りない慈愛の心で、たゆまずこれを続けた。

この思いやりと献身の心は天界の梵天(ぼんてん)を感動させた。梵天は空から下って来てオウムに語った。「おまえの心はけなげであるが、この大いなる火をどうして羽の滴で消すことができよう」。オウムは答えて言う。「恩を思う心と慈悲の心からしていることができないはずはない。わたしはどうしてもやる。次の生に及んでもやりとおす」と。梵天はオウムの偉大な志にうたれて、力を合わせてこのやぶの火を消し止めた。

（『雑宝蔵経(ぞうほうぞうきょう)』より）

〈解　説〉

オウムが無理だと思われても、火を消そうとする決意と努力に心を動かさざるをえません。貧困、戦争、殺人事件、気候変動などのいろいろな巨大な社会問題に対して、私たち一人ひとりがどれだけ貢献できるかについても同じように感じるかもしれません。何かしたいと思っているけれども、私のようなちっぽけな者に何ができるのだろうか?と思ってしまう。そこで、このオウムの説話は私たち

に重要な教訓を教えてくれます。

自分が問題だと思っている事に対して、いくら小さくても何かをやってみる。やってみると元気が出て来ます。その教訓は、私たち全員が小さな役割を果たせば、その小さな力が集まって、不可能と思われる作業を達成する巨大な力になるということです。例えば、特に気候変動は深刻な問題になっていますが、中には、それを改善するような運動をしている人たちもいます。この説話のオウムのように努力したいものですね。

〈質疑応答　②〉

〈①〉　私は「泥に咲く蓮華」の話が心に響きました。

〈ケネス〉　Yさんにとって、この比喩（ひゆ）にある〈泥〉に当てはまるような体験はありますでしょうか？

〈①〉　あります。

〈ケネス〉　皆さんにもありますよね。それに対して、それを教訓にして、また良い結果が生まれる

ということはあります。

〈①〉　きれいな所に花があっても、そんなに感じないのだけれども、〈泥〉があるからこそ、花が余計にまたきれいに見えるということもあります。

〈②〉　日本も戦争中に中国に侵略していろいろと悪いことをして来ました。その時に、日本は賠償金を払っていなかったのですよね。賠償しないで済んだ理由は、蒋介石が日本の軍閥だけを敵として、日本の国民は敵とせずということを強調して、それによって日本はとても助かったという話を読んだことがあります。日本があれだけ悪いことをしても、その責任として日本に賠償を要求しないというリーダーもいたんだなと、人を〈許す〉ということについて感じました。

それから「Yesterday is history. Tomorrow is a mystery.」という詩の言葉がケネス先生のものだと思っていたんですね。そうしたら、ある友人からルーズベルト夫人がスピーチで使っていたことを聞きました。

〈ケネス〉この詩はインド系アメリカ人の医者であり哲学者でもあったDeepak Chopraという人が仏教のことを知っていて、それに基づいて作ったそうです。

〈②〉　やはり仏教のベースがあったのですね。

〈ケネス〉　今日の講義で取り上げた「**過ぎ去った日のことは悔いず、まだ来ない未来にはあこがれず、とりこし苦労をせず、現在を大切にふみしめてゆけば、身も心も健やかになる。**」というのはお釈迦様の言葉ですよ。こういう教えを知っていたのではないでしょうか。

〈③〉　Deepak Chopra氏の詩の話ですが、一九〇二年に既にこの言葉が出ているということをある本で読んだことがあります。また、孟子も似たようなことを言っています。

〈④〉　先生のお話は何回聞いても新鮮なのですが、今日は「今・ここ」を大切にという話が印象に残っています。

〈ケネス〉　何回も繰り返して聞くということについて「正聞薫習（しょうもんくんじゅう）」という言葉があります。これは唯識仏教の言葉です。出家して修行ができない人であっても、何回も繰り返して聞くという方法が大切であるということです。

浄土真宗では、特に「聞法（もんぽう）（仏教の教えを聞くこと）」ということを強調しますので、修行しなくても良いのですが、何回でも聞くということを大切にしています。忘れてもよいので、一生涯「聞く」ことをしてください。聞いていると、また聞きたくなるのですよ。私もいつも発見があります。

〈質疑応答　②〉

〈⑤〉　今日の話の中で〈尊さ〉というところの解説で「私たち人間の命を無駄にせず、人生の夢を実現し、そして他の人の役に立ちましょう。」という言葉がありました。「他の人の役に立ちましょう。」ということは、障害者にはちょっと厳しい、誤解を受けやすい言葉かなと感じました。

先生がたぶん意図されたのは、そういうことではなくて、一つひとつの命があること自体が他の命との共生による達成なので、人の生存を「役に立つとか、役に立たない」という基準ではかってはいけないと。命に、生きることに〇や×があるのではなくて、生きていること自体に〈尊さ〉があるよと。

以前に「やまゆり園事件」を受けて、朝日新聞の記事に「ただ生きているだけの人生を、人はついつい否定的に捉えがちだけれども、〈ただ生きている〉ということは、何かの欠如ではなくて、それこそが一つの奇跡的とも言える達成なのである」と以前に書かれていたことがありました。

ケネス先生の言われている〈命の尊さ〉というのは、たぶんこの記事に書かれていたような意味ではないのかなと、私は理解しているのです。

〈ケネス〉　おっしゃっている事に異論はありませんし、まさにそうあるべきだと思います。「他者のためになりましょう」というのは、仏教に「自利利他」という言葉がありまして、その「利他」と

いう精神を述べたのですが、もちろん、それができない人もいらっしゃる。ただ障害を持っている方でも何かできることもあるのではないかと思うのですよね。しかし、それを強制してはいけないし、他者のために何かできないことは価値がないということでもありません。

ですから、私たちのように、何かできることがある場合には、老後にゴルフばかりでなくて、自分の知恵とか経験を生かして、特に若い世代の人たちのために、あるいは周囲や地域のためになるような精神があってもよいのではないかなと思います。

先ほど、アーナンダの衣（ころも）についての説話の最後に「**わがものではなく、一時的に預っているものに過ぎない**」という言葉がありましたが、私たちはいろいろな物事を〈あずかっている〉ということであれば、やはりこの世で少しでもお返ししたいという気持ちはあってもよいかなと思います。

※法然上人の父親の遺言の言葉：

決して犯人を恨んではならない。私が非業の死を遂げるのは、前世からの種まきの結果であり、因果応報なのだ。もし、そなたが敵討ちをすれば、相手の子供が、またそなたを敵と狙うだろう。敵討ちが幾世代にも続いていく。愚かなことだ。父のことを思ってくれるなら、出家して、私の菩提を弔い、自ら仏法を求めてくれ。

〈質疑応答　②〉

●この講義録は、いくらかでも分かりやすくするために便宜的に編集・補足・加筆をしてあります。また、講義後の質問も応答も、聞き取れない部分があったりすること等から、ある程度整理してまとめた形にしておりますことをご了承ください

本稿は、字句や内容の訂正や付け加えが行われることを前提として、編集者の責任において仮に作成した草稿のようなものです。間違いなどございましたら、どうかご教示いただければ幸いでございます。

なお、講義の内容について転用・引用等をする場合には、必ず〈出典〉を明記してください。